

自己を磨く

「惚れる」ことで見えてくる

私の好きな言葉に、「人や物事の魅力に心をひかれすつかり夢中になる」といった意味のやや俗な言い回しで「惚(ほ)れる」という言葉があります。これまでの体験から、教師として「惚れる」ことの大切さを実感するこの頃です。

○子どもに惚れる

私の小学生時代には、貯蓄奨励のためか、学校で「子供銀行」という定期的にお小遣いを預かるシステムがありました。多くの子が何百円という当時としては高額な預金をする中、兄弟の多い家庭に育った私は、お使いのごほうびで得たわずかな小銭を持って行ったものです。時の担任の先生は、私の名前こそ言いませんでしたが、こつこつと貯めた小銭を預金することに価値があることを皆の前で話され、間接的に私を励ましてくれました。一人一人の育つ家庭環境をしっかり把握し、的確な見守りと励ましでどの子ども等しく大切にし、惚れてくださった担任の先生への憧れが、私の教職の道への原動力となりました。

○学校に惚れる

同僚性という言葉がトレンドですが、私は優れた力量を備えた先輩から多くのことを学びました。『前任までの学校は良かった』ではなく、『現任校こそ最高!』と誇れる職員であれ」との助言や、自らの苦労話ばかりか失敗談をも大らかに語られる先輩の、教師としての心意気に感銘を受けたものです。現在、新しい教職員の評価制度もスタートしましたが、この評価制度は、職員一人一人の目標実現への自己管理の営みであり、創意と熱意をもってやり遂げる過程を通して自信と意欲を高めるものであります。そして、校長として職員個々の多様なよさを確認できる制度でありたいと強く願っております。

○地域に惚れる

地域に根ざした特色ある学校が求められる今日ですが、職員がそろって地域に顔を出し、保護者や地域の皆さんと語らい、行動することで地域を肌で感じ取ることができ、地域にしつかり根っこをはやすことができます。ところで、私はどの地域にも「宝島」があると信じております。地域に根っこを生やしながらその地域ならではの「宝島」を発見する。その「宝島」を子どもたちの教育活動に取り込んで学校の特色として生かしていく。このように、地域に惚れ地域の中の「宝島」を生かすことで保護者や地域の皆さんにも、さらに学校に惚れていただける良いサイクルが生まれるように感じております。

○授業に惚れる

学校は学ぶところであり、「授業で勝負」の気構えを大切にしたいものです。そのためにも、大相撲での勝負前の力士の仕切り同様、気合の入った授業研究が大切だと思えます。若かりし頃、授業研究に夢中になり、自宅で度々夜が白々と明け行く経験もしましたが、こうした授業への一途な思いも大切にしながら、授業の奥深さに触れ楽しむことこそ教師冥利に尽きると思っております。

さて、「ドット・コム」はメールアドレスの一部としてすつかりおなじみですが、この「ドット・コム」にあやかり、「惚れる」の字の上下に「トコトン・コム」を付けると「とことん・惚れ・込む」となります。自己の「教師力」の向上を目指し、「惚れる」教師から「とことん惚れ込む」ことのできる教師にグレードアップできるよう、さらに自らを磨いていきたいと考えております。

困難を乗り越えていける強さを

私が新採としてS小学校に着任したのは大学を卒業して何年か経ってからである。児童数が二千名近い学校で、新採者三名が配置された。その中で最年長だった私は、最初から一年生担任だった。一学年八クラスの大所帯であったため、一年間一度も起案というものを経験することがなかった。

次の年、学校の分離独立に伴い、新設校のG校に異動となった。私が出張から帰ったときには、既に校務分掌が決まっていたように記憶している。私の係は体育主任と学校安全の主任であった。新設校に着任された校長先生は体育専門で、起案がなかなか通らないという情報が入っていたので、体育主任だけは避けたいというのが大方の先生の本音であったと思う。

新設校には、すべてを新しく創り出していく大変さがある。G校では決裁を受けるものはすべて起案によって行う体制がとられたため、体育関係の行事や学校安全に関わる細かいことも起案が必要となった。また、美術の免許をもっていた私は、校旗・校章・綴帳・プールのデザインや、制服・制帽の制定にまで関わることになった。さらに児童指導主任の先生の後期内留により、その仕事も任された。起案の経験をしたことのない新採二年目の仕事と考えると、少し無茶であったかもしれない。

一年目とは打って変わって忙しい生活となり、帰る時刻は遅く、家での起案文書作成が日課となった。すべてが初めての経験で、先輩の先生方などに一から十まで教えていただかなくてはならなかった。見よう見まねで行う仕事、密度の濃い仕事などできるはずもなく、ただ期日に間に合わせるのに一生懸命だったように思う。毎日わずかの時間を見つけては、先生方に質問する生活が続いた。しかし、すべての先生方がいやな顔ひとつせず丁寧な教えてくださった。夜遅くなることもしばしばだった。

今思うと、そうした時間が、先生方の経験から得た知恵に触れるかけがえのない時間だったのだと思う。そして、このような先生方との関わりが、やがて自分を支えてくれる大きな力になったと思っている。苦勞させることの意義を表す諺があるが、いつの時代にも普遍であると改めて思う。大事な仕事を与えていただき、先生方から様々なことを学んだことが心の支えになり、教職を続ける強さになつていいることを思うと、感謝の気持ちでいっぱいである。

先輩や同僚に謙虚な姿勢で学ぼうとするとき、先輩・同僚は必ず手を差し伸べてくれる、そして、たくさんの人間関係が自分を支える力になる、困難な仕事でもしっかり向き合い、それを乗り越えていくことが自分を鍛え、強くすることになるということを学んだような気がしている。

教師にとって厳しい時代が続くが、これからの教師はそれを乗り越えていかななくてはならない。しかし、子どもに情熱をもって向かうとき、必ず子どもたちは応えてくれる。子どもの成長する姿を見て喜ぶことを生業とする仕事、季節を感じながら子どもたちとともに学んでいく仕事、こんな仕事があるだろうか。教師の仕事に魅力を感じてこの道を選んだ原点に立ち返るとき、子どもたちのためならどんなことでも頑張っていけるのではないかと思う。謙虚に学ぶ姿勢をもって仕事に向かい、教師としての仕事に情熱を持ち続け、子どもたちのために日々精魂を傾けていける強さを身に付けてほしいと思うのである。

「K先生を見てご覧。自分の仕事が終わるとほかの先生に声をかけて手伝ってるのよ。忙しいときはみんなで忙しく、ゆっくりできるときはみんなでゆっくり、ということですね。見習うといいですよ。」

初任のときに学年主任のI先生に言われた言葉です。

子供のときから先生に憧れ、学生るとき斉藤喜博先生の著書「島小の女教師」に出会い、ますます教師という職業に魅力を感じて着任した学校現場でしたが、夢と現実の違いに幻滅を感じていた頃だったと思います。

自分の至らなさを知り、それから「人に学ぼう・真似ぼう」と思うようになりました。

今日までいろいろな方から多くのことを学ばせていただきましたが、その中から特に次の三点を若い先生方に伝えたいと思います。

- ① 専門性を持つこと
- ② 月謝を払って習い事をする事
- ③ 人とのつながりを大切にすること

①の「専門性」ということでは、私は三つの体育研究会に所属していました。それぞれに研究の方向性が違いましたので、学び方や指導法を身につける上で大変有意義でした。互いの実践を情報交換しあい、追試してまた他の人に伝えるなど、教師という創造性のある職業冥利に尽きる楽しさを味わうことができました。これからの先生方には、厳しい教育界を生き抜くために「このことなら、あの先生に聞いてみよう。」と言われるもの（専門性）を必ず持つてほしいと思います。

②は「教師でいる間は、自分も何かを他に師事しなさい」ということです。とかく子供を相手にしている教師は傲慢になりがちです。「教えている」ということで何か偉くなったように錯覚しがちです。他に習うことにより自分の教え方を反省したり、教わる側の気持ちを知ったりできます。反面教師もありましたが、自分を振り返るよい機会となりました。「我以外皆教師」が私の座右の銘となっています。長続きしてものになった習い事がないのが残念ですが…。

③は仲間づくりです。特に結婚や子育て、親の介護など、家庭の中でも重要な役割を担う女教師にとって、課題は山積んでいます。

研究会では、研究内容について議論を戦わせたあと私的な悩みを聞いてもらったり、解決のヒントをもらったりして、次への意欲や向上心を掻き立てられたりしたことも数多くありました。勤務校が一緒でない仲間とは、日頃のしがらみがないので、気楽に話せることや、教育環境の違いから視野が広がるという良い面がありました。人との出会いはありがたいものです。

私が若い頃は男性教師が多く、女性は男性に従っていればよい時代でした。その中で出会ったY先生は「女性でもリーダーシップがとれるこんな素晴らしい方がいらっしやるんだ。」と目を開かれる思いのする方で、厳しい指導の中に心配りがされていて、「この方について行きたい」と思わせる魅力がありました。性格が違うので真似はできませんでしたが、何か困難に出会ったとき「Y先生ならどうなさるだろう？」と考えることができました。

教員生活を振り返って「人との出会いにより、支えられて自分は今日まで生かされてきた」ということをしみじみ思います。同業者以外の友達が少ないのが残念ですが、それは今後の楽しみということに。

教師として不易なこと

初めて教師になり、赴任した時のことを今でも覚えています。埼玉県秩父市立浦山中学校（現在は廃校）、一年担任。生徒は十人（男八人、女二人）でした。この十人の生徒の顔と名前は今でも覚えています。出席簿のつけ方もわからず、家庭訪問の仕方わからず授業の理解度をどこにおいて進めればよいかもわからず：。（先輩のベテラン教師がつけてくれました。）今顧みると迷惑ばかりかけていたと思います。生徒はまさしく十人十色でした。

その時の校長が「愛と信頼」について語ったことがありました。内容は違いますが、教育における「愛と信頼」とはこんなことではないでしょうか。

「お互いが信頼の上に立つ教育をしたいものです。先ず生徒を信頼しましょう。信頼することとは愛することから生まれます。愛するということは、価値の受容者であり、創造者である生徒の内に潜む価値実現の可能性を信じ愛することです。お互いが生徒を愛する教師として、仲間として、信頼しあう教師集団を作りましょう。」

さて、こんな看板を見たことがあります。「退屈な授業は教師の負け」これは何を意味しているのでしょうか。教師にとつては同じ内容の授業を週に五回も六回もします。しかし、その授業はその子の人生の中で、今だけのたった一回の授業であることを忘れてはいけないと思います。大切なことは「教師は授業で勝負する。教師は実践で勝負する」ではないでしょうか。

昔から専門職としての教師は一人で五役（すなわち五つの職種）をこなさなければならぬと言われています。それは学者、医者、役者、易者、芸者（達者という人もいます）です。これは今でも十分に通用することです。

教師というものは、

- 一 学者として、十分な専門知識を持ち、学問を探求する姿勢を教える。生徒が出す質問にたどどころに答えるだけの専門的な該博な知識を身に付けておく必要がある。
 - 二 医者として、生徒一人一人の「わからないところ」を早期発見し、早期治療、早期回復に努める。同時に「勉強したくない病の患者」の適切なカルテを書き治療にも当たる。
 - 三 役者として、教室という舞台で授業を新鮮に演出し、観客という生徒を引き付け、飽きさせない。変幻自在が望まれる。
 - 四 易者として、子供たちの将来性や進むべき道について見通しを立てて、適切なアドバイスを与える。特に、担任は生徒の将来を担う責任を負う仕事であることを肝に銘じなければならぬ。
 - 五 芸者として、生徒たちにとって楽しい学校時代を送らせるためのエンターティナーでなければならぬ。
- 以上が五者の説明です。もちろん、こんな理想的な教師に誰もがすぐになれるわけではありません。しかし、私たち教師が五者をめざし、懸命にかつ誠実に努力していれば、いつかはかなうことです。五者をめざすために必要なことは「本を読む」「人間を学べ」「自己研鑽を怠るな」です。自戒を込めて。

お薦めする本

森 信三 教師のための一日一語 寺田一清 編 致知出版社

安岡正篤 一日一言 安岡正泰 監修 致知出版社

宇都宮市立雀宮中学校 鈴木 希 一

趣味の力

趣味と言えるものは二つほど。一つは日曜大工であり、もう一つは民族楽器ギターを弾くことである。趣味という言葉の意味の中にある「ものの美しさやおもしろみを理解し味わう力」ということからすると、二つとも該当するのではないかと自分なりに思っている。楽器は毎日三〇分から一時間程度練習をし、日曜大工については必要に応じて休日に製作している。なかなか趣味の時間を生み出すことは難しいので、二つともまだまだ技術的には未熟である。

民族楽器ギターについては、楽器の音色に引かれ、現在月に一〜二回レッスンに通っているが、なかなか思うようにはかどらない。受けたレッスン内容に工夫を凝らしながら毎日練習しているが、手が素早く動いてくれないだけでなく、リズムが狂うと家内から「そのところおかしいわよ」とクレームがつき、ピアノでリズムをとってもらっている始末である。しかし、難しいところがやがて弾けるようになると嬉しいものである。このように、悪戦苦闘しながらなんとかやってこられたのも、弾けなかった曲が弾けるようになった喜びや美しい名曲を弾きたいという目標があったからだと思っている。

日曜大工については、教頭職の時に修繕や物を作る機会が多く、仕事の一部が趣味になってきたようなものである。いろいろな道具に慣れるに従い様々な物作りにチャレンジするようになった。物作りでは、あらかじめ機能面での条件を十分に踏まえる以外にデザインのことも考慮しながら作品をイメージし、次にそこに使用される材料・材質や道具などを検討したり、作業工程についても計画したりするなどして、作業に入るようにしている。ある程度作品のイメージや作業段取りがまとまると、予算を頭にインプットし、ホームセンターへ足を運び、材

料探しから始まる。機能面やデザインなどを頭に描き、材料を手に取り、自問自答しながら時間をかけて探し回る。ホームセンターは創造力を大いにかき立ててくれる場である。製作の段階では、作業工程の段取りを間違えると大きな失敗をするので、工程によっては作業を念入りに進めなくてはならない。作品の善し悪しはよい道具とそれを使いこなす技術が大きく影響するが、完成したときの達成感、満足感は何とも言えないものがある。難しい作品であればあるほど、その喜びと充実感は大きい。特に褒められたり、おだてられたりすると次の作品製作の大きなエネルギーとなる。

以上、私のつたない趣味を紹介したが、それが自分の仕事に対していろいろな面で役だっていることを日々実感している。それは、趣味に向き合う過程で教育に関わる事柄をたくさん体験するからだと思っている。これまでの様々な体験から、趣味にこだわりを持つようになることさらに深みのある事柄が身に付いてくるのではないかと思う。例えば、「継続は力なり」という言葉は、趣味を継続して取り組むことによって、言葉の意味が深く理解され、言葉に重みが増すようになってくると思う。趣味に没頭すればこだわりが生じ、それが自分の能力に磨きをかけ、ものがよく見えるようになってきたり、幅を広げたりしてくれる。それは趣味の世界だけでなく、仕事の面においても自分の視野を豊かに広めてくれるものと思っている。たかが趣味ではあるが、仕事の面で大きく影響している。趣味は人生を楽しく豊かにしてくれるだけでなく、教育という仕事を側面から力強く支えてくれている。また、それは埋もれた能力を掘り起こしてくれるかもしれない。

経験してきたことから

放課後、合唱部の美しい歌声と、サッカー部の指示し合う声が快く響いてきます。穏やかな夏休み明け、生徒たちは熱心に授業に取り組んでいます。

こうした生徒たちを前にして、今、改めて「望ましい教師の姿」を考えると、「果たしてどんなものなのだろう」と考え込んでしまいます。あれこれ考えて思いついたのは、「教養があり、洗練されていて、礼儀にもかない、人により感を与え上品さ」ということです。子供の中にも上品さを充分感じさせる子もいますが、大部分の子が学校生活などを通して、様々な礼儀作法や教養を身に付け、洗練された好ましい大人に成長していきます。この成長過程で、子供たちの前に立つ私たち教師は、子供たちにとって少しでも模範的な大人であることが求められるのではないのでしょうか。私たち教師は生まれも育ちも皆違います。しかし、児童生徒の前に立つには、まず誰もが健康な肉体と精神を求められ、その中から醸し出される気品が求められるでしょう。そして、私たちは少しでも人間としての上品さを身に付けると同時に、教師としての研修を重ね、児童生徒にとって魅力ある人格者として児童生徒の前に立つのがよりよい教師の姿ではないのでしょうか。そのような先生方から、若かった私はいろいろ学ばせていただきました。

例えば、学習指導面で、「児童生徒が自主的に課題解決に対処していけるようにするにはどうしたらよいか。」というようなことでした。そのためには教科等の学習の計画をしっかり立てさせ、学習の技術や方法をしっかり理解させること。グループ学習の仕方を通して「一人学び」の方法を一人一人に身に付けさせること等を学びました。残念ながら、これは志半ばでついにやり遂げるところまではいきませんでした。努力するうちに、児童の活動は活発になるとともに児童が自主的に学習をするようになり、一人一人の意欲の高まりやグループ活動の活性化に繋がっていったように思われます。特に、学芸会や体育科等での表現活動では、生き生きと演技をしていた児童たちの姿が今でも思い出されます。

次に、最近多くなってきた問題で、いわゆるクレイマーと称される問題について述べたいと思います。この問題は、人権に深く関わることで多く、発件数も今後ますます多くなりそうです。私たち教職員は、学校として解決できない部分を理解してもらおうように対応しますが、この類の問題を訴える保護者の中には、自己権利の主張や自己正当化をし、他の生徒のことを考えず、自分の子供の正しさだけを証明しようとする方も見られます。そして、問題の核心を知っているのが当事者の子供だけである場合が多く、問題解決を他の機関などに頼ることができません。結局解決できないままになってしまいます。当事者の子供が真実を言わないことが多いからです。しかし、当事者は自分の子が原因ではないと信じて疑いません。その結果、真実は不明という曖昧な形で収束に向かいますが、決して事件が解決した訳ではないので、双方ともすっきりした気持ちにはなれません。それでも学校は、根気強く事実経過を繰り返し説明し、理解を求めていかねばなりません。この場合にも「教師の姿」がにじみ出てきます。

忍耐と努力を惜しまず、愚直と思われても継続することからは、実践する教師の気品が漂ってきます。気品のある教師は、児童生徒に意欲を喚起できる魅力ある教師になれるのではないのでしょうか。

学びつつある教師のみ教える資格あり

教職十五年目でした。私は、先輩教師から「学びつつある教師のみ教える資格あり」という言葉を聞きました。そして、私に「なぜ、学ぶ必要があるのか。」と問われたことがあります。教師という仕事にも大分慣れ、自分自身への厳しさを忘れかけていたころでした。

先輩の言葉を、さらに具体的に考えていくと、「なぜ、研修しなければならぬのか。」にもつながります。教える内容や方法がすでに完璧なら、講習会や研修会等に参加する必要はありません。授業が、学級や担当するすべての子どもに対応できるのなら、研究授業を実施して自分の指導力をより高める必要ありません。

また、人権教育ではよく保護者啓発という言葉が使われますが、この啓発の前提には、自己啓発が必要だと思えます。つまり、自己啓発なくして保護者啓発はできないのです。

先輩は「教師は、完璧ではない。だから、謙虚に学びなさい。つまり、自分が不完全であることに気づきなさい。」と教えて下さったのだと思います。私にとっては、衝撃に近い言葉でした。

それでは何を学ぶのか。私は、一つは専門性、もう一つは人間性を高めていくことだと考えます。もちろん、二つはきちんと線引きして分けられるものではないと思います。両者関連し合いながら、互いを高め、深まっていくものだと思います。

まず、専門性については、公開発表会や研修会等に目的をしつかりともって参加することです。専門性は、確実に向上していくと思います。また、研究授業を積極的にやってみることは

重要です。教師は授業のプロです。指導力を高めていくのは当然です。もちろん、子どもたちとの日々の実践の中で学ぶことは数限りないほどあります。

次に、人間性を高める・深めることについてです。「教師として」の前に「人として」があります。これは、極めて重要なところだと思います。「豊かな人間性」を培っていくのです。もしかすると、人間性は磨いていくものかもしれませんが、磨いていることが、子どもたちを「感化」していくのだと思います。場合によっては、「薫陶」という言葉の方が、より当てはまるかもしれません。

さらに「失敗から学ぶ」ことも大切です。「失敗と書いて経験と読む」という言葉もあります。失敗から謙虚に学び、次に活かしていくことです。

「学びつつある教師のみ教える資格あり」、そして「不完全さの認識」を教えていただいているから二十数年が経ちます。きっと「完全」にはなれませんが、「不完全」から「完全」に、少しでも近づこうとしていく努力が大切なのかと思います。教師としての原点を示していただいた先輩からのアドバイスでした。

まとめにはありませんが、「教師は親ではない。兄弟でもない。友だちでもない。餓鬼大将でもない。だが、そのすべてでありたい。」長野県の毛涯章平先生の言葉です。(『ただひたすらに』第一法規)

生きることは学ぶこと

「人は人によって人となる」、職員室の壁に掲示されている日めくりカレンダーのことうばである。三十七年の教職期間を振り返ると、まさに実感としてうなづくことばである。なぜうなづくかという点、これを「子どもは教師によって人となる」と言い換えてもいいほど、教職の重さを感じているからである。教師は、子どもの一生に大きな影響を与える存在である。教師のたったひとことできえ、その子の現在を、将来を左右することが、現に多くある。

亀井勝一郎さんは「私は人生における最大事は邂逅だと語ってきた。ある時期、誰と出会ったことで心の転換をせしめられたか。その誰が人生の根幹を成すのではないか。自己は自己のみから生まれることはできない。必ず他者において自己となる。」と著書に書いている。教師は、子どもたちにとっての「誰」になれる、いや、ならなければならない存在であると思う。

この「人」と「誰」に値する、子どもによい影響を与えられる教師になるには、やはり「教師として人として学び続けること」であろう。教職経験にかかわらずである。千葉県の元教員・校長の野口芳宏さんは「までの努力、からの努力」を強調している。「教師になるまで、あるいは校長になるまでの努力は誰でもよくする。だが、教師、校長になってから努力をする人は少ない。」ということだ。素直に聞こう。素直にとらえたい。

「からの努力」をどのようにしたらいいか。特に、教職十年前後までの人は参考にして欲しい。茶道の千利休の教えに、「何かを学び、ひとり立ちしていくまでの過程で、人は守・破・離の順に成長していく。」というのがある。まずは、先輩の真似をし、その教えを素直に守ること。次に、教えを守るだけでなく破る行為、つまり自分で創意工夫し、新たなやり方を考える

こと。さらに自分の技量を高めるため、自分自身の考えで学んだ内容を発展させることである。このステップは、教職にかかわる者にも大いに参考になるものである。

教師として自己の何を高め、磨かなければならないか、必要な資質は数多くあるが、教職に携わる者すべてに共通すること、私は特に二つをあげたい。

一つはもの見方考え方をより深くすることである。この本質がわかり、全体を見ることができ、先を見通せる見方・考え方であります。表面思考、部分思考、目先思考だけでは教育効果が心配である。私の経験からだ、宗教書はもの見方・考え方を深めるのに役立つ。信州教育研修の折、長野の教員は正法眼蔵、典座教訓、歎異抄等の輪読会を学校単位で行っているのを知った。以来影響を受け、様々な宗教書の解説書が主だが、二十数年愛読している。ちなみに、正法眼蔵は相田みつをさんの生涯の座右の書である。

もう一つは感性を磨くことを続けることである。豊かな感性とは、高久清吉さんのことばを借りるが「人間や自然事物などについて、その真理や事実、よりよいもの、より美しいもの、より崇高なものに対する鋭いしかも安定した感受性」であります。「冷暖自知」ということばがある。冷たい、暖かいというのとは自分で感じてみない限りわからないという意味である。子どもたちの感性を育てるとき、教師の感性の度合いが問われる。まさに冷暖自知であります。

教職は困難なことが多いが、負けずに自信をもって前向きに教育実践してほしい。自信は学び続けることによってより大きくなり、より本物となる。

「教師として生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること」であります。